

早乙女勝元

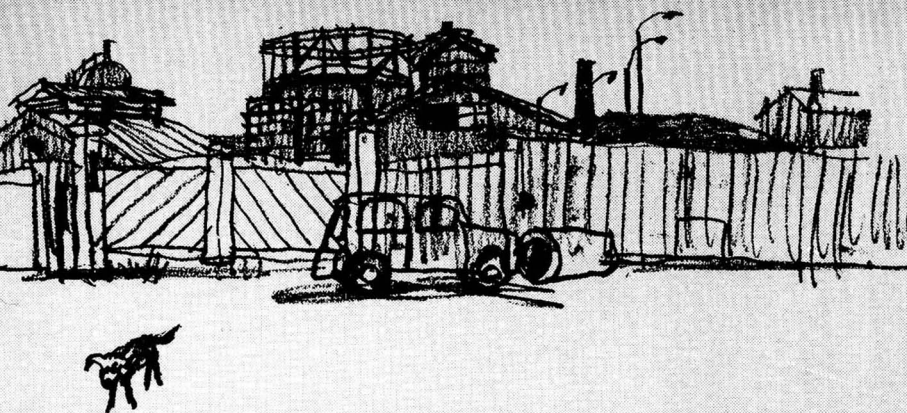
小説選集

7

小麦色の 仲間たち



早乙女勝元小説選集



早乙女勝元小説選集・7

小麦色の仲間たち

1963・初版

作者 早乙女勝元 ©

画家 久米宏一

制作 小宮山量平

発行 山村光司

株式会社 理論社

東京都新宿区若松町一〇四

電話 〇三(203)五七九一

振替 東京九一九五七三六

B 6 冊 344P 0393-90907-8924

一九七九年 八月 第三刷

はじめに

「十二文」「会長」「クロちゃん」という愛称をもつ三人は、そのへんの街かどでぞろっと見かけるような、陽やけて小麦色の頬の、お調子者でいきのいい労働者のアンちゃんたちです。

労働者といっても、小さな家の土間に、原始的な機械をおいて、おやじといっしょに働いているような、そういう日本の労働者としては最低の、零細企業の青年たちです。

場所は、東京の下町。

時は、一九六〇年。

この仲間たちが、一つの町の問題をめぐって、どのようにたくましく動きだすか。

……その前に、ちょっと、かれらとそのまわりのメンバーを御紹介しましょう。



キャスト

▼木村牧男 22才、零細企業に働くプレス工。

「『もの申す』の投書者になりすましてからというもの、大好きなイチ子が、ぐっとかたむいてきやがった。……しめしめ、万事こうこなくちゃ……」

▼佐藤新治 23才、零細企業に働くバフ工。

「バー・クロンボのひさ恵は、しめりがちの目で、おれのこと、じいっと見ていたで。あいつ、気があるんだ。そうとしか思えないでな……」

▼土沢五郎 22才、零細企業に働く運転手。

「『もの申す』は、おれさまが書いたんだ。へへつ、あの子のためによう。書きおえたら柱時計が鳴ったぞ。ボンスカボン、ボンスカボン……てなぐあいにな」



▼西村イチ子 20才

食堂いずみ屋に働く娘。

「あたしはね、たくましい人が好きなの。と、いったって、外見じゃないのよ。意欲……生きてゆく上での意欲、そういうものよ」

▼堀 ひさ恵 22才、バー・クロンボに働く娘。

「あたしのこと、へんな女だと思うでしょうねえ。夜、こんなところへきていて。でも……でもね。それも、しかたがないのよ」

▼江川京子 21才、町いちばんの美しい娘。

「ああ、あなたが『もの申す』の方だったんですか？ そういえば、道でときどきお目にかかりましたわね」



▼内藤喜久男 24才、自動車会社のセールスマン。

「なに、喫茶店から灰皿を？ けちな。おれなんざあ、テーブルからイスまではこびだし、ついでに女の子までくすねてくらあ！」

▼平野良作 38才、零細企業のおやじ。

「それじゃ、一発いわせてもらいやしよう。最低一口千円の寄付たあ、ありやいったいなんですか。しかも生活保護の世帯からもむしりとって、……」

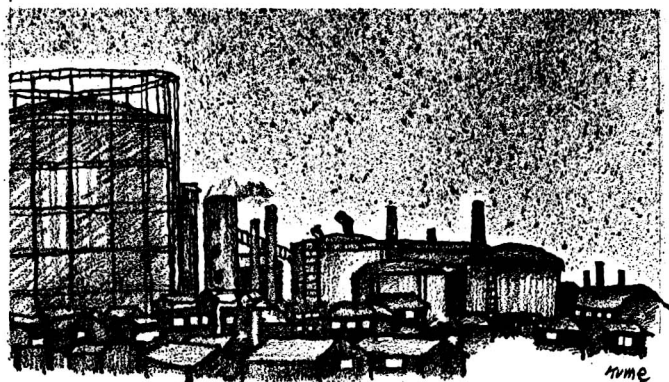
▼村瀬 淳 54才、靴製造下うけ業のおやじ。

「いや、連中はぼくを犯人だと思ってね。いきなり、メモをつきつけて、住所と名前を書けってつめよるんだよ。はっはっ……」

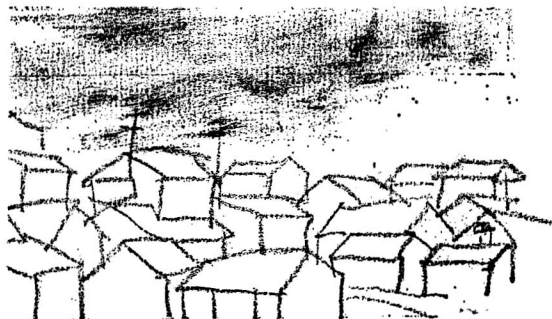


もくじ

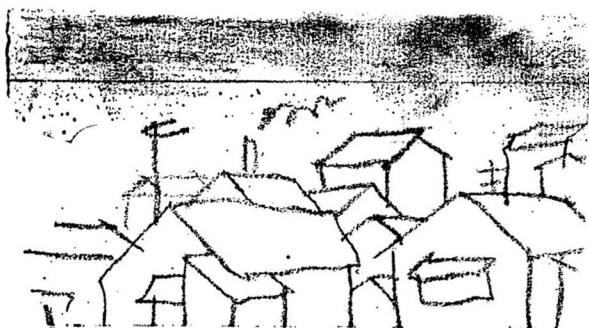
はじめに	／ 1
1 ふしぎな日	／ 9
2 投書	／ 14
3 チューハイ組	／ 20
4 その朝	／ 27
5 つむじ風	／ 34
6 影の男	／ 39
7 バラのとげ	／ 45
8 クロンボの夜	／ 50
9 橋の上で	／ 57
10 部屋さがし	／ 63
11 リオ	／ 68
12 筆跡鑑定	／ 74
13 つばくろ	／ 79



28	うねりのなかを／	164
27	小麦色の娘／	158
26	鏡見るたび／	152
25	駅前広場／	147
24	密談／	142
23	街角／	135
22	暗い火花／	130
21	第三ラウンド／	124
20	星ひとつ／	119
19	恋の味／	114
18	第二ラウンド／	109
17	第一ラウンド／	102
16	朝のらくがき／	97
15	赤のピラ／	91
14	紙の屋根／	86
29	にがい酒／	171



45	ひとりぼっち／	260
44	のろしのように／	254
43	花ことば／	250
42	指が！／	244
41	三番目の扉／	237
40	がんと一発／	231
39	男の意地／	226
38	かごぬけ／	221
37	タレント会議／	216
36	自炊の朝／	210
35	疑惑／	205
34	反撃へ／	198
33	ダブルパンチ／	193
32	夜風をきって／	187
31	いくじなし／	182
30	夜のふちで／	177



そうてい・カット・久米宏一

てのひら自叙伝へ／／ 339

57 エピソード／ 333

56 採決／ 326

55 決戦／ 320

54 会場へ／ 314

53 委任状／ 307

52 町のなかへ／ 301

51 町内ニュース No1／ 296

50 きいてくれ！／ 289

49 鬼門／ 283

48 せせらぎ／ 277

47 全額公費で／ 271

46 なめくじ荘で／ 265



1 ふしぎな日

それは、まったくふしぎな日だった。

木村牧男は、仕事場にむかう朝のジャリ道で、金をおろしたのである。

金額は六百円だった。はじめ、百円札一枚足もとにおちているのを見つけ、そこから、ものの二メートルとゆかないところで、こんどは、五百円札を見つけたのだ。しかし、二枚の札が、こんなうまいぐあいにおちていることがあるだろうか。さあ、ひろっていただくといわんばかりではないか。

木村は、どきんと息がつまった。とつさに、何者かが、計画的にしくんだものではないかと思つたのである。

二枚の札を手の中ににぎりしめると、目の玉だけをうごかして、すばやく、あたりをさぐつた。が、だれもいしなかった。すると、つぎの期待が、かれの心をとらえた、百円から五百円、ひよつとして、こんどは千円札でもおちているのではないか。

木村は胸の高鳴りをおさえることができず、身体ぜん

たい前かがみになり、くいいるように足もとのジャリを見つめて、ざくざくと道を歩いた。興奮から、ひとりでに口のまわりの筋肉がもりあがつてきたが、この期待はあつてなくうらぎられた。かろうじて、五メートルばかりいったところで、まあたらしい犬のくそを見つけただけのことである。

「ちえっ、ばかにするなッ！」

いまいまいげにはきすて、二枚の札をポケットの中にねじこんだ。

ちやうど、千円分だけ損をしたような気がしたが、まあ、しかたがない。六百円でも、ないよりはましさと、自分にいいかせたものである。

道は、路地うらを右に左にうねって、私鉄電車の踏みきりを越えたところに、ちいさなゴミすて場の原がある。原の南北にかけて、ひしゃげたようなブラックが、ひくい軒をつらねていたが、この建物の一隅に、かれの仕事場があった。

たてつけの悪い戸を、いくらかもちあげるようにしてあけると、

「おうっす！」

四十才に近い平野良作が、つきでた目をぎよろつとむきだして、

「なんでえ、朝っぱらから、うかねえツラして。金でもおとしたのか？」

「金？」

木村はびっくりして、

「じよ、冗談でしょう、おとす金なんかあるもんかって」
ひろう金はあつても……と、出そうになったのを、あわてておさえた。うっかり口をすべらせれば、平野のことだ。それでバイーとゆこうとくるにきまつてる。そうなれば、せつかくの収獲物も消えて、それ以上に足が出るかもしれない。

「はあ、さては……あれだな？」

平野は、上目づかいに木村の顔をのぞきこんで、意味ありげな笑いをうかべた。

「みろ、ドンビシャだろ？」

「なにがです」

「とぼけるな、きまつてるじゃねえか。出前の箱を、こう左手に、OPPバイをジェット機みたいにつんだして、ぶういっと自転車をとばしていく……」

「いずみ屋」のイチ子のことを、いつているのだった。

イチ子、イチ公、西村イチ子。その愛称は、この小さな屋根の下に、毎日さいげんもなくくりかえされるのに、何度耳にしても、ふしぎとききあきることがない。さらに光って、水玉のような新鮮なひびきを残す。やみくもに働くばかりですぎてゆく日々のなかに、それだけが唯一の生甲斐のように思えるときもある。木村は、かすかに息をぬいて、白い歯なみをのぞかせた。

「ふふっ、ジェット機とはよかったな」

「や、もう、にたにたしやがつて。さてはうつたのか、鉄砲を？」

「まだまだ」

「まだるっこくていけねえや。おめえさんの戦法は」

「鉄砲どころか、今朝なんか、ものすごい低気圧。朝めしの金がたりなかつたら、横目でジロリですかんね。たかが十円ばつこでよ。もつとも、きのうは、もうちょいまずかった。財布ごと忘れちまつてね……」

「あほう。そんなときにうつてみろ。弾がてめえの胸にはねかつてきて、大きな穴をぶちあけるわ。ま、おめえだったら、再起不能ってところかな」

「それだって、やるさ。あいつの心臓めがけて、一発バチンとね」

右手の拳を左手につきあてて、木村はリンゴ箱の上に腰をすえた。油でうすよれた手ぬぐいを頭にまく。右手の指に、ゴムサックをはめる。

あの六百円の金で、そうだ、イチ子になにか買つてやるかな……と、しおらしいことが頭をよぎった。どうせひろった金だと思えば、おしげもなく使うことができる。それとも佐藤や土沢たちと、一杯やるか。いや、まてまて。二枚の札がばらばらにおちていたというのが、どうもふにおちない。おれがひろつてゆくのを、だれかが物影からうかがっていたのではないか。にやにやと、ほくそえみながら……。

なに、それにしたところで、かまうもんか。ひろったからにはおれのもの、とベタルにかけた右足を、力いっぱいふみおろした。

ストロークがさがり、どかんと地ひびきをたてて、雌型のなかの板金が、雄型の鋭い刃の下にうちぬかれた。すると、品物は生きもののようブリキのみぞをすべって、足もとの竹あみかごのなかへおちる。一個うちぬい

て四銭、これが木村の手間だ。といつて、この小説は昔前のもではない。時は一九六〇年のこと。一円玉が子どものおもちゃにされる時代に、銭とはまたけたはずれな単位だが、それがちりつもつて、一日の手間にかわるのである。

ほんの二坪ばかりのせせこましい平野の家の土間には、三台のプレスがならび、木村と平野と、平野のかみさんが、一個うちぬいて四銭の作業を、あくこともなくくりかえしている。プレスは動力をつかわない最小のもので、ぞくに「八十貫」とも、「ケトバシ」ともよばれる。右足でベタルをふみながら、雌型のなかの品物をうちぬき、あるいはまげて、小さな板金にさまざまな加工をくわえるのだ。

しかし、仕事が順調に流れることはすくなかった。

ときには、もうれつにせがまれたかと思うと、二日も三日もとぎれることがある。平野のことばをかりれば、それはまさしく、「下痢と便秘」の連続だったが、品物はすべて、アメリカむけのオモチャの部品ときまつていた。アメリカがくしゃみをする、日本が風邪をひくというたとえ話のはやる今日このごろ、どんなあわただし

い仕事といえども、目の前にきたものを逃すわけにはゆかない。

木村は、夢中になって、ペタルをふみつづけた。

一個四銭として、八百円の手間をあげるには、二万個。たつぷり十時間かかる。だが、それも、午前中かなりのところまで「あおって」「おかない」と、午後は目に見えてスピードがおちるのだ。あらゆる雑念をおいはらって、手も足も、機械の一部分のように呼吸をあわせる。

左手に品物をたばねてもち、右手の二本指でこれをとるなり、さっと、雌型メタイプのなかへいれる。その指をたちまちかえして、ふたたび品物の上にかけたとき、一気にペタルをふむ。手をひいてふむ。これがケトバシ作業の基本だ。しかし、「あおり」をかけるときは、そんなのんきなことはいってられない。品物をなげいれる一方、足はふみつばなし。一息ちがえば、あつというまに、右手の指を失うだろう。

汗がたらたらと、頭髮から流れて、目にしみこんだ。が、もう手をはなすことはできない。一度調子が狂えば、スピードもおちて、もつとも危険なときがやってくる。二つの目は雌型のなかに釘づけにされ、からつぽの頭の

なかに、ときどき二枚の札がちらついた。

札のむこうに、イチ子の顔がうかぶ。

ふふつ、ジェット機みたいなオッパイとは、平野も隅におけない。おれにしたところで、あの胸見ると、目がくらむものな。息がつまりそうになるんだから、たまつたもんじゃないよ……。

「君」

とうとう肩をたたかれて、木村はとびあがらんばかりにおどろいた。

ふりかえると、あけはなされた土間を背にして、一人の男が立っている。両足をひらいた姿が、せまい戸口いっぱいにふさがって見えた。

チャコール・グレイの背広。油気のない髪。その顔に見おぼえはない。度の強いメガネのおくから、男は木村の顔をなめるように見て、乾いた声をなげた。

「木村牧男さん、ですな？」

「ええ……」

リンゴ箱の上から、のろのろと腰をうかして、ぎこちなくうなずいた。

とたんに、一つの思いが光のようにひらめいた。さっ

きの六百円のことだ。それいがいになにもない。とすると、この男は私服か。いや、私服がきたにしても、これほどまでにうろたえることはなかったろう。

木村がかたずをのんだのは、ゴミすて場の原に、水色の高級車が見えたことだった。後尾のびんとはねあがつたクライスラーである。むろん、男がのつてきたものだ。すでにもめずらしげに、近所の子どもたちが車をとりまき、物見高い長屋のかみさんたちが、おずおずとこちらをのぞいている。なにごとかと、ささやきをかわしているのである。

「どちらさんですか？」

平野が、油の手をボロでふきながら、口火をきつた。

「私、こういうものですが……」

男は、ポケットから名刺をとりだした。

わきから目をそそぐと、A新聞社会部・直木徹とある。思ったとおり新聞記者だ。この町の警察に、あんな高級車があるはずはない。

「こちらの木村さんの投書で、さっそく調べにきたのですかね」

「え？」

木村は、目を見はった。

「投書ですよ」

「……」

「#もの申す#ですよ」

寝耳に水とはこのことだった。

木村は口をあけたまま、信じられぬようにまばたきした。

A新聞といえは、その部数と格式からいっても、日本全国に配布網をもつ第一級の新聞にちがいはなかった。現に、木村は毎朝下宿の便所のなかで、この新聞のスポーツ欄だけをよんでいる。しかし、投書がどうしたのか。それが自分とどういうつながりがあるのか。いぶかしそうに眉をよせる木村に、多少のはがゆさを感じたものか、記者はメガネをかきあげて、

「あなた、木村牧男さん……でしょ？ 稲葉町六〇三番

地の？」

「……ですが」

「あなたの投書で、取材にきたんですよ。問題が問題ですからね」

といいながら、上着のポケットから、一通の茶封筒を

とりだした。それでプレスプレスの腕をはたはたとはいてから、雌型メダイの上におく。

木村は仰天した。

封筒のうらには、稲葉町六〇三・森田方、木村牧男と、まさしく自分の住所氏名が書かれているではないか。

それも、かれの字よりも、はるかにととのった正確な書体だった。表をかえすと、A紙の住所・社名がていねいにしるされ、その横に、

『もの申す』係様 至急親展

と、あざやかに書きこまれてあった。

謎はとけた。こともあろうに、木村の住所と名前をかたつて、A紙に、なにかただごとならぬ苦情をもちこんだ人間がいるのだ。

「なるほど」

と、木村はふんべつくさげにうなずいて、封筒のなかから便箋をとりだした。

指さきがよごれていたせいか、茶封筒のふちにべつとりと、スタンプのような黒い油がしみついた。

2 投書

『もの申す』の投書は、便箋三枚にわたって、こまかいペン字でうずめられていた。

どうひいき目に見ても、うまいといえる書体ではなかったが、子どものような正確な文字で、一字一字きざみこまれたようにならび、おれの字にしゃや出来すぎるなど、木村は緊張のなかにも、奇妙なおかしさを感じないわけにはゆかなかった。

はじめて、おたよりいたします。

私は、稲葉町にすむ勤労者で、毎日プレスを踏んでいる一青年です。

よけいなことを書いたものだ。

木村は、ふんと鼻を鳴らしたが、仕事のことまで精通しているとなると、これはただ者ではない。プレスには、機械プレス、油圧プレス、水圧プレスと無数にあるが、踏んでいるとなると、ケトバシがいにならないのだ。そこ